

1 学校教育目標

<教育理念>

地域の特性を生かし、国際化の進展に対応した学校づくり ～飛翔～

<教育方針>

6年間の計画的・継続的な教育活動を通して、生きる力を育み、誇りと自信をもって世界に飛躍する人材の育成を図る。

<6つの特色ある教育活動「飛翔プロジェクト」>

- 1 大学・地域連携＝コミュニティ・スクール導入による大学や地域との連携
- 2 人間教育＝生徒会活動・部活動等による豊かな人間性と主体性の育成
- 3 学力育成＝6年一貫の効果的な教育課程による学力育成と進路実現
- 4 国際教育＝国際交流と語学教育の充実によるグローバル人材の育成
- 5 サイエンス教育＝理数教育や講演会等の充実による理系人材の育成
- 6 総合「海峽学」＝キャリア教育と探究活動による主体的学習者の育成

2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)

(1) 確かな学力の保証

→ 各学年・教科で学力面のデータ分析を行い、全教員で共通理解を図り、授業改善などに取り組んだ結果、昨年度も如実な学力向上がみられた。今後とも一層学力向上に取り組む。

○新大学入試制度に対応した指導の研究を深め実践する。

- ・次期学習指導要領に対応した新教育課程の研究に全教科で取り組み、編成を終えた。さらに、新大学入試制度についても研究を深め、より効果的な教育課程の実施に努めたい。

○生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。

- ・授業以外の学習時間については、生徒・保護者の約半数、教員の5割が不足していると感じている。その割合は下がっているが、引き続き本校の大きな課題である。

○世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実を図る。

- ・例年開催している本校や、民間業者による英語学習セミナーは、昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大により実施できなかった。今年度は、できる範囲で実施する方向で動いている。
- ・A L Tと理数教科教員でイメージ教育を実施し、本校全体で研修に取り組んだ。今後も研修を進めていきたい。
- ・平成29年度入学生から、4年生時の14日間カナダ語学研修に変更し、より効果的な英語教育を目指していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、その実施ができなかった。現在国内の語学研修施設を使用した代替措置を検討中である。
- ・小中高連携英語教育推進校として、小中の英語教育の現状を認識し、スムーズな繋がりを意識した本校英語教育の実践を図った。

○ICT活用を通じて、より主体的・対話的な学びを促し、自己の考えの再構成・再構築を図り、深い学びにつなげる。

- ・1人1台端末（指導者用・学習者用）が整備され、授業や家庭学習での積極的な活用を図っている。
- ・ICT研究指定校として、ICT活用の基本的部分に関する教員研修を複数回実施した。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

→ 一人ひとりに対応した適切な指導により、就職希望者8名は公務員7名を含め希望実現、進学希望者98名は86人が希望を実現した。

○生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学等ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。

- ・例年実施している、1年生で下関市立大学訪問、2年生で山口東京理科大学訪問、3年生で山口大学本学訪問、4年生で志望大学オープンキャンパス参加は、新型コロナウイルスの感染拡大により、未実施に終わった。3～5年生での県内国公立大学講師による「大学出前講義」は実施することができ、生徒の進路意識の向上を図ることができた。

○本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。

- ・小論文対策・面接対策に組織的に取り組み、成果をあげた。
- ・各教科で本年度から始まった大学入学共通テストを分析し、その傾向・対策についての意識を深めた。

(3) 豊かな心をもち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

→ 各分掌・学年で人間教育に取り組む、着実に成果をあげている。

○生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。

- ・本校のリトル・ティーチャー制の実施については、生徒・教職員ともに9割が肯定的に捉えている。各種行事において、生徒の企画・運営・指導力を発揮させ、生徒の自主活動を推進させることができた。
- ・寮生もリトル・ティーチャー制の実施については9割が肯定的であり、寮生活においても自立心が育ち、円滑な生活を送ることができた。

○人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。

- ・新型コロナウイルスの感染拡大により、他国からの本校訪問は無かったが、学校行事や学年行事で、生徒が主体的に活動する場を多く設定し、望ましい集団の育成に努めた。

○留学制度について啓発活動の充実を図り、生徒の参加を促進する。

- ・新型コロナウイルスの感染拡大により、海外留学制度の活動が止まっていたが、今年度の「トビタテ！留学JAPAN」への参加希望者9名のうち8名の生徒が既に一次審査を通過するなど、留学を希望する生徒が増加した。

(4) 組織としての課題解決力の確立

→ 全教員がリスクマネジメント意識を持てるように今後とも計画的に研修に取り組んでいく。

○教科研修会と互見授業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。

- ・各教科で定期的・計画的に研修会を開催し、教科指導力向上に励んだ。
- ・イメージ教育活動を実施し、教員全体で研修に取り組んだ。

○生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。

- ・計画的に研修を実施した。引き続き教員の指導力の一層の向上を図っていく。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

→ 志願倍率が1.7倍と昨年より若干下がったが、引き続き強い目的意識と高い学力を持った児童が志願した。

○本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実を図る。

- ・「飛翔プロジェクト」を推進し、地域・保護者への広報活動の充実することにより、本校の教育活動の理解が深まった。

○小学校とその保護者を対象とした広報コンテンツの充実を図る。

- ・新型コロナウイルスの感染拡大により、本校は小学生対象の各種行事を実施できなかったが、市内小学校への広報活動により、強い目的意識と高い学力を持った児童が志願した。

<p>3 本年度重点目標</p> <p>本年度は、飛翔プロジェクトを円滑に運営することで、地域や大学との連携を一層深めながら「未来社会を生き抜く総合的な人間力」と「高い学力」を培い、世界に飛躍する人材の育成に向けて教育活動の充実に努める。</p> <p>(1) 確かな学力の保証</p> <ul style="list-style-type: none"> ○新大学入試制度に対応した指導の研究を深め実践を進める。 ○生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。 ○世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実に努める。 ○ICT活用を通じて、より主体的・対話的な学びを促し、自己の考えの再構成・再構築を図り、深い学びにつなげる。 <p>(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。 ○本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。 <p>(3) 豊かな心を持ち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。 ○人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。 ○留学制度について啓発活動の充実に努め、生徒の参加を促進する。 <p>(4) 組織としての課題解決力の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教科研修会と互見授業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。 ○生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。 ○新入学生の着実な学校生活への適応の為、教員全体で学習面・生活面におけるフォローを進める。 <p>(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加</p> <ul style="list-style-type: none"> ○本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実に努める。 ○小学校とその保護者を対象とした広報コンテンツの充実に努める。
--

4 自己評価					5 学校関係者評価		
分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
教務	ICTを活用した授業改善	一人一台端末や大型提示装置などのICT環境を生かした授業を展開し、学力向上を図る。	<p>4 授業評価アンケートにおいて、80%以上の生徒が「ICTの活用により学びが深まった」と回答した。</p> <p>3 授業評価アンケートにおいて、60%以上の生徒が「ICTの活用により学びが深まった」と回答した。</p> <p>2 授業評価アンケートにおいて、40%以上の生徒が「ICTの活用により学びが深まった」と回答した。</p> <p>1 授業評価アンケートにおいて、「ICTの活用により学びが深まった」と回答した生徒が40%に満たなかった。</p>	4	<p>○第1回アンケート（7月）における肯定的回答は全校で83.7%、第2回（12月）は86.2%となり、年度内において数値の上昇がみられた。</p> <p>○校内全体でICTの活用が進み、生徒自身もICTが学びの質の向上につながることを感じ始めているようである。</p> <p>○今後は、生徒それぞれが学力の伸びを実感できるような、戦略的なICTの活用方法について、学校全体で研究していく必要がある。</p>	ICTを活用した授業に対する肯定的な意見が増えていることは評価できる。ICT機器等を、単に教具の代替としての使用ではなく、これまでにできなかった新しい実践をするなどが「活用」と言えるのではないかと。また、ICTの活用をいかに学力の充実・向上につなげていくかということも課題である。利用に関する常識の育成が必要である。	A
	家庭学習習慣の定着・向上	朝学や授業の予習・復習の取組を強化し、生徒の家庭学習習慣の定着・向上を図る。	<p>4 学習アンケートにおいて、「家庭学習やテスト勉強を行う際は、計画を立てるなどして見直しをもって取り組んでいる」と回答した生徒の割合が年間を通じて大きく増加した。</p> <p>3 学習アンケートにおいて、「家庭学習やテスト勉強を行う際は、計画を立てるなどして見直しをもって取り組んでいる」と回答した生徒の割合が年間を通じてやや増加した。</p> <p>2 学習アンケートにおいて、「家庭学習やテスト勉強を行う際は、計画を立てるなどして見直しをもって取り組んでいる」と回答した生徒の割合が年間を通じてあまり変化しなかった。</p> <p>1 学習アンケートにおいて、「家庭学習やテスト勉強を行う際は、計画を立てるなどして見直しをもって取り組んでいる」と回答した生徒の割合が年間を通じて減少した。</p>	3	<p>○第1回アンケート（7月）における肯定的回答は全校で76.0%、第2回（12月）は78.1%となり、年度内において数値がやや上昇した。</p> <p>○スケジュール帳の活用等により、自己管理能力が育ちつつあること、また、5回生で行った、学力向上にむけた生徒主体の取組が一定の成果を生んだことなどが背景にあると思われる。</p> <p>・自らの学習を調整する態度は、家庭学習習慣の定着に不可欠なものであることから、今後も生徒の主体性を高めるような取組を展開していきたい。</p>	家庭学習の定着については、アンケート結果から一定の成果が得られている。学習に対する自主性や主体性の涵養は難しい点も多い。どうして学ぶのか、という意識を如何に自発的に持たせるか、皆で知恵を出し合う雰囲気や教員間で共有されることが重要である。	A
	英語教育の充実	英語での発信力を高める授業方法について研究するとともに、パフォーマンステストを年間を通じて計画的に実施する。	<p>4 すべての学年・科目において、パフォーマンステストを年1回以上実施した。</p> <p>3 ほぼすべての学年・科目において、パフォーマンステストを年1回以上実施した。</p> <p>2 半分程度の学年・科目において、パフォーマンステストを年1回以上実施した。</p> <p>1 多くの学年・科目でパフォーマンステストを実施することができなかった。</p>	3	<p>○一部の科目（6回生の英語科目）を除いて、ほぼすべての学年・科目でパフォーマンステストを年1回以上（多い学年では3回以上）実施することができた。</p> <p>○観点別評価の充実を図るため、知識・技能以外の観点についても積極的に評価するよう工夫した。</p> <p>○特に、ICTを活用したパフォーマンステストについては実践の蓄積がなされてきており、今後はさらに、計画的かつ組織的な取組を教科全体で展開できるようにしていく必要がある。</p>	英語に関する学習の意欲を惹起するために、海外におけるコミュニケーションの必要性を実感してもらうことが一番近道と考えられる。コロナ禍で難しいことも多いと思うが、生徒の自主的な海外交流を促すなどの工夫も必要と思われる。	A

分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価	
生徒指導	生徒会活動・学校行事におけるリトル・ティーチャー制の推進	生徒会活動、学校行事等で、リトル・ティーチャー制を取り入れ、上級生から下級生への仕事の指導や計画的な引き継ぎにより、学校行事や生徒会活動などを活性化させる。	4 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が80%以上である。	4	○86%の生徒が、学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという認識がある。かつ、93%の生徒が、幅広い年齢層の生徒がいることは自分にとってプラスだと思っている。本校の最大の特徴である6学年の生徒が在籍する強みが十分に生かされており、下級生にとって理想となる先輩像を上級生の姿を通して見る場面が多く、今後の見直しをもって学校生活を送る一助となっている。	リトル・ティーチャー制度については、とても良い取り組みである。リトル・ティーチャーに就任することが、励みになるような認証制度や表彰制度があると先生役の生徒の自信にもなると思われる。	A	
			3 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が70%以上である。					
			2 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が60%以上である。					
			1 生徒による学校評価アンケートの学校行事・生徒会活動で、上級生は仕事を親切に教えてくれたあるいは教えたという結果が60%未満である。					
	ボランティア活動の活性化	校外や校内でのボランティア活動など、地域に目を向けた活動を計画・実施する。	4 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が80%以上である。	2	○今年度も新型コロナウイルスの影響で、学校外の活動としてのボランティア活動はほぼ中止となったが、66%の生徒が、本校はボランティア活動が盛んだと感じている。活動は校内に限られたが、歳末助け合い運動や収集ボランティアなど、積極的に活動している。また、教育学部を志す後期生が前期生の学習をサポートするボランティア活動「Chuto Peer Support Learning」も順調に運営ができています。	コロナ禍だからこそできることが、ICTの活用から考えられるのではないかと。また「ボランティアとは何か」等を生徒にディスカッションさせる場も必要であろう。さらに本目標のアンケートの問いは主語が不明瞭である。質問項目、調査方法や目標値の設定を見直すとうまいであろう。	C	
			3 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が70%以上である。					
			2 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が60%以上である。					
			1 生徒による学校評価アンケートのボランティア活動が盛んだという結果が60%未満である。					
	挨拶を含む生徒のマナー・規範意識の向上	交通安全指導、あいさつ運動を通して、ルールからマナー・エチケットへと意識改革を図るとともに、情報モラルや薬物乱用防止の講演会を計画・実施する。	4 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が80%以上である。	4	○97%の生徒が、本校の「生活の心得」や身だしなみについてを含めたマナーを守って学校生活を送っているとの認識がある。ただ、25%の生徒は「どちらかといえばいい」を選択している現状があるため、「中等生らしく」とはどういうことなのかを自分で考え判断し、他社への思いやりをもって自律した行動をするという姿勢を今後も高めていきたい。	他者への思いやりは自己肯定感が無いとできないであろう。自己肯定感の涵養も必要と考えられる。また、規則に縛りすぎず、常識感覚を身に付けさせ、それを基に行動するように生徒の意識を高めるとよい。	A	
			3 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が70%以上である。					
			2 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が60%以上である。					
			1 生徒による学校評価アンケートの「生活の心得が守られている」という結果が60%未満である。					
いじめ・問題行動等に迅速に対応する組織的な生徒指導体制の確立	積極的な生徒指導を推進し、かついじめ・問題行動等に迅速に対応するために、学年間、教員間の情報共有と、組織的な対応を実施する。	4 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、迅速かつ組織的に対応することができた。	4	○生徒の抱える不安や悩みおよび人間関係のトラブルなど、課題解決のため教職員が月1回の情報交換を行った。また、速やかな情報共有が教職員間で徹底できているため、校内メールや情報共有ファイルを活用し、緊急性の高い課題については、随時緊急対応やケース会議を行うなど、チーム対応することができた。今後も研修などを通して、背景には「いじめ」があるのではないかと疑い、認知力の感度を高めていきたい。	アンケート回答の中に、『いじめアンケートは無記名だから相談する側には安心感があるのに、現在の様式ではそのメリットをつづがしているようにしか思えない。』というコメントがあった。何か工夫が必要である。	A		
		3 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、組織的に対応することができた。						
		2 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、対応することができた。						
		1 生徒の心を育てる予防的・教育的な働きかけを行い、生徒の変化への気づきや生活アンケート等で分かる課題に対して、対応することができなかった。						
進路指導課	キャリア指導	総合的な学習（探究）の時間「海峡学」を活用して、校内・校外の人との対話の機会を数多く設ける。	4 90%以上の生徒がキャリア意識（進路意識）の向上を肯定的に感じた。	4	○91%の生徒がキャリア意識が向上したととらえている。「ようこそ先輩大学セミナー」「出前講義」のほか、3・4年生では「企業探究活動」を実施し、キャリア意識の向上や進路選択に生かすことができた。6年生が講師となる「キャリア講演会」や外部講師による「進路講演会」を通して、学校生活を送る上での目標設定の重要性や受験に向けた取組についての理解を深めることができた。	キャリア指導を様々な機会を捉えて実施していると評価できる。成人年齢の引き下げに伴い、すべての生徒が成人として卒業する状況になる。キャリア教育も「ライフキャリア」という考え方で展開していく必要がある。また、基準がやや漠然としており、もう少し具体的な例示があつての設問が必要と思う。	B	
			3 80%以上の生徒がキャリア意識（進路意識）の向上を肯定的に感じた。					
			2 70%以上の生徒がキャリア意識（進路意識）の向上を肯定的に感じた。					
			1 生徒のキャリア意識の向上は十分に認められなかった。					
	進学指導	進学実績の向上	模試の成績状況を活用した進路検討会（模試分析会）を各教科・各回生において実施する。	4 進路検討会を各教科・各回生それぞれで3回以上実施できた。	3	○成績資料を模試ごとに提供し、学力向上に向けて、各回生で進路検討会を複数回実施した。同時に、進路検討会で選出した成績上位者を中心に、最難関大プログラムの一環として駿台やZ会のハイレベル模試の受験を勧めた。3、4年生では、コース選択の材料としても活用できた。	こまめに各学年へ成績資料を提供し、希望者模試についてもより積極的な受験指導を引き続き行っていただきたい。また、回数だけを指標にすることが適切かどうかは分からない。何か別の指標を考えても良いと考えられる。	B
				3 進路検討会を各教科・各回生それぞれで2回実施できた。				
				2 進路検討会を各教科・各回生それぞれで1回実施できた。				
		新大学入試への対策の充実	新大学入試に関する必要な情報を「進路だより」等で提供し、ポートフォリオシステムの周知徹底を図る。	4 入試情報を5回以上提供し、ポートフォリオのシステムの周知徹底を図ることができた。	2	○今年度は「進路だより」の発行はできなかったが、4～6年生では学年ごとに新大学入試に関する情報を適宜提供した。ポートフォリオに関する情報は、キャリアパスポートの活用と併せて周知徹底することができた。	新しい入試に対しては、大学との情報交換が重要と思うので、その機会を大学としても考える必要がある。逆に大学も高校側の情報を必要としている。情報交換や意見交換の場を大切にしていれば有難い。	A
				3 入試情報を3回以上提供し、ポートフォリオのシステムの周知徹底を図ることができた。				
				2 入試情報を1回は提供し、ポートフォリオのシステムの周知徹底を図ることができた。				
保健体育課	体力の向上と心身共にたくましい人間力の育成	体育的行事や日々の生活の中で、主体的・積極的に活動し、良好な対人関係を築く力を高め、体力及びたくましい人間力の向上を図る。	4 人間力の向上に積極的に取り組み、80%以上の生徒が、構成要素2項目以上に、成果をあげたと感じる事ができた。	4	○新型コロナ感染対策及び雨天のため体育大会の規模を縮小し、代替えとして一部競技の屋内開催・リモート視聴で開催したが、事後アンケートでは、80%以上の生徒が、人間力が向上したと答えていた。 ○実行委員が、コロナ禍でも安全な内容・方法を企画してリーダーシップを発揮し、全校生徒が協力した成果が十分に見られた。 ○活動・行事の縮小傾向が見られるコロナ禍においても、体力・人間力の向上に向け、今後も継続して重点的に取り組みたい。	体育大会の代替企画を生徒が企画し実施できたことは、生徒の人間力の向上につながったと思える。体力テストの結果が、全国平均に比べて、いろいろな項目でも、やや低めなところが気になる点である。	A	
			3 人間力の向上に積極的に取り組み、50%以上の生徒が、構成要素2項目以上に、成果をあげたと感じる事ができた。					
			2 人間力の向上に積極的に取り組み構成要素2項目以上に成果をあげたと感じる生徒が、50%未満であった。					
			1 ほとんどの生徒が、人間力の向上に積極的に取り組むことができず、成果があがらなかった。					
	清掃・環境美化意識の向上と実践力の育成	見つけ掃除を中心とした清掃活動・校内美化活動の取組や生活委員会との連携を通じて、生徒が積極的に校内の環境改善に携われる行動意欲の向上を図る。	4 生活委員会の点検の結果、80%以上の清掃区域で清掃活動が良好に行われることができています。	4	○生活委員会による掃除活動チェックの結果、80%以上の区域で清掃活動が良好に行われており、その結果を生徒会の掲示板に掲示するとともにさらなる環境美化を呼び掛けた。 ○校内美化に関するアンケートでは、生徒の肯定的な評価は90%以上、保護者の肯定的な評価は85%以上であり、掃除への取組意識や教室内での美化意識は比較的高い。	清掃活動が上手く活動できているようであると思う。今後ともこの取り組みが伸びていくような指導や取組が必要と考える。	A	
			3 生活委員会の点検の結果、60%以上の清掃区域で清掃活動が良好に行われることができています。					
			2 生活委員会の点検の結果、50%以上の清掃区域で清掃活動が良好に行われることができています。					
			1 生活委員会の点検の結果、50%未満の清掃区域で清掃活動が良好に行われていなかった。					

分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
保健体育課	ICTを活用した教育活動を健康的に推進していくための意識の向上	保健便り、委員会活動、掲示物等を通して情報発信すると共に、生徒に自身の生活習慣やICT機器の使用方法について振り返らせ、自分の健康は自分で守る意識や態度を養う。	4 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が80%以上であった。	4	○学校保健安全委員会主催講演会後のアンケートではICTとの付き合い方を見直そうと思ったと回答した生徒が97.5%と、ほぼ全員の生徒の意識に変容が見られた。 ○ICT機器を活用した教育活動を健康的に推進していくために、「ほげんだより」に記事を掲載したり、生徒健康委員会の活動で掲示物を作成したりすることができた。引き続き、本校の健康課題を的確に把握し、課題解決に向けて取り組みたい。	ICT機器を用いる際の健康への影響を喚起することは、上手くできていると思う。今後とも、このような取り組みを適切に行われることを期待する。さらに今後求められるのは意識の変容から行動の変容ではなからうか。	A
			3 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が60%以上であった。				
			2 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が40%以上であった。				
			1 学校評価アンケートの保健衛生に関する項目で肯定的な評価が40%未満であった。				
寮務課	自治活動の活性化による寮生活の充実	寮長、階長、専門委員長を中心とした自治組織を見直し、それぞれが活発に活動することによって、集団生活に必要な規律を身につけさせ、円滑な寮生活を送ることができるようにする。	4 各委員会が自主的に活発な活動を通して、充実した寮生活が送れたと感じる生徒の割合が80%を超えた。	4	○寮生のアンケート結果では肯定的な回答が83%であった。特にコロナ対策で黙食となった食事時間に寮長が音楽を流す取組をしたことや厚生委員長がレクリエーションの内容を工夫したこと、環境委員長が掃除の取組を工夫したことなどがよかった。	寮長など自治組織の役割を担った生徒を表彰する制度など、この役割を担うことが負担ではなく、名誉であることを示す仕組みがあると良いと思う。	A
			3 各委員会が指示されながら活動を通して、充実した寮生活が送れたと感じる生徒の割合が80%を超えた。				
			2 各委員会が指示されながら活動を通して、充実した寮生活が送れたと感じる生徒の割合が60%を超えた。				
			1 各委員会が活動について指示されたにも関わらず、十分に活動することができなかった。				
中等教育学校推進課	リトルティーチャー制を生かした学力の向上	学習時間に上級生が下級生の学習を見守り、アドバイスをする活動を取り入れることによって、お互いがよい刺激を受けて学習のつまづきを解消し、学力の向上を図る。	4 学習時間に生徒相互がよい刺激を与え合い、充実した学習をして学力を伸ばしたと感じた生徒の割合が80%を超えた。	4	○アンケート結果によると、幅広い年齢層の生徒がいることが自分にとってプラスだと答えた生徒が93%、勉強や仕事を親切に教えた、教えてもらったと答えた生徒が86%と高い肯定率であった。	リトル・ティーチャー制度については、とても良い取り組みと思う。寮においても、リトル・ティーチャーに就任することが、励みになるような認証制度や表彰制度があると先生役の生徒にも自信になると思う。	A
			3 学習時間に生徒相互がよい刺激を与え合い、充実した学習をして学力を伸ばしたと感じた生徒の割合が60%を超えた。				
			2 学習時間に静かに集中して学習することができ、学力を伸ばしたと感じた生徒の割合が60%を超えた。				
			1 学習時間に集中して学習することができず、学力を伸ばしたと感じた生徒の割合が60%に満たなかった。				
中等教育学校推進課	国際交流活動や留学、海外研修等を通じ、グローバル人材を育成	海外派遣事業や諸外国からの学校訪問の受入等を積極的に行うとともに、「総合的な学習（探究）の時間」（「東アジア文化入門」・「海峡学」）を充実させることで、国際交流に積極的に関わる姿勢を醸成する。	4 学校評価アンケートの国際教育に係る項において、肯定的な回答は80%以上であった。	4	○コロナ禍で海外からの訪問が全くない中、外部事業（「EUがあなたの学校にやってくる」）の活用やオンライン交流（韓国）により、国際交流を実施することができた。 ○生徒93%、保護者80%、教員96%が肯定的な回答であった。 ○ただし、保護者の内「4はい」の回答は29%で、情報発信が課題である。	オンライン開催にもかかわらず、内容の充実が高い評価につながった。今後は情報発信の手段としてWebページが重要であろう。タイムリーな更新が必要であり、参加生徒に記事を書かせるなどの方法で、教員負担を減らしながら、情報発信をする方法も有ると思う。今後、国際交流都市でもある地元下関と共同した学習の展開を期待したい。	A
			3 学校評価アンケートの国際教育に係る項において、肯定的な回答は60%以上であった。				
			2 学校評価アンケートの国際教育に係る項において、肯定的な回答は40%以上であった。				
			1 学校評価アンケートの国際教育に係る項において、肯定的な回答は40%未満であった。				
中等教育学校推進課	ICT教育の積極的な導入により、各教科における学力と情報活用能力を伸ばし、高度情報社会に適応できる人材を育成	教員の校内研修を充実させるとともに、互見授業・研究授業を通じて授業力を向上させる。	4 ほとんどの教員がICT機器を用いた授業を実践し、学校評価アンケートのICT教育に係る項において、肯定的な回答は80%以上であった。	3	○教員研修を計画的に実施した。 ○ICT機器を用いた授業を実践した教員の割合は、98%に達した。 ○ICTの利用から活用へが課題。 ○保護者の肯定的な回答は78%で、4の達成基準まであと一歩であった。 ○前期課程の保護者の肯定的な回答が、全ての学年で80%以上に対し、後期課程の保護者の肯定的な回答は、全ての学年で80%を下回っているため、保護者のニーズをさらに詳しく分析する必要がある。	ICT機器を活用した学習については、保護者世代が経験していない（慣れていない）ことなので、学校からの情報発信について、オンラインPTAや保護者会などを実施する方法もあるかと思う。	A
			3 多くの教員がICT機器を用いた授業を実践し、学校評価アンケートのICT教育に係る項において、肯定的な回答は60%以上であった。				
			2 半数以上の教員がICT機器を用いた授業を実践し、学校評価アンケートのICT教育に係る項において、肯定的な回答は40%以上であった。				
			1 ICT機器による授業を実践した教員が半数未満であり、学校評価アンケートのICT教育に係る項の肯定的な回答は40%未満であった。				
中等教育学校推進課	学校図書館の活性化やNIEの実践を通じた生徒の健全な教養の育成	学校図書館の充実を図りながら、図書委員会（生徒）の活動を一層活発なものとし、また、NIEの実践により、新聞を通じた生徒の社会事象に対する興味関心を高める。	4 学校評価アンケートの学校図書館活動並びにNIEに係る項において、肯定的な回答は80%以上であった。	3	○学校図書館の充実について、肯定的な回答は、生徒86%、保護者44%、教員79%であった。保護者の内、「0わからない」の回答が、52%にのぼった。 ○図書委員会の活動の充実により、生徒の図書館利用は確実に増えているので、「図書だより」の定期的発行等、保護者への情報発信が必要。 ○NIEについて、生徒の肯定的な回答は74%であり、NIEを一部の教員の取組から全校的な取組へと発展させる必要がある。	図書館の利用状況は保護者にはなかなか伝わりにくいと思われる。この評価指標が適切かどうかどうも含め、検討される方が良いと考えられる。	B
			3 学校評価アンケートの学校図書館活動並びにNIEに係る項において、肯定的な回答は60%以上であった。				
			2 学校評価アンケートの学校図書館活動並びにNIEに係る項において、肯定的な回答は40%以上であった。				
			1 学校評価アンケートの学校図書館活動並びにNIEに係る項において、肯定的な回答は40%未満であった。				
大学・地域連携課	本校教育の魅力が家庭や地域に向け効果的に発信	学校ホームページの充実や「学校説明会」、「入学者選抜説明会」等の機会を通じて、本校教育の魅力が家庭や地域に向けて効果的に発信する。	4 学校評価アンケートのホームページに係る項において、調査結果の肯定的な回答は80%以上であり、各説明会の参加者は10パーセント以上増加した。	2	○ホームページについて、肯定的な回答は、保護者74%、教員91%であるが、「3どちらかといえばはい」の高さが目立つ上、保護者からは充実を求める厳しい意見が寄せられた。 ○発信方法、頻度等について、根本から改善する必要がある。 ○「入試説明会」の参加児童数は、139人であり、前年比+3人であったが、入試の志願倍率が1.3倍（前年度1.7倍）であり、その原因と「説明会」との相関関係を詳しく分析する必要がある。	ホームページの改定が定期的になされていないことへのコメントがあったと思う。なかなか日常の業務もあるので難しいと思われるが、生徒に記事を書かせるなどの参画方法が使えるようにも思われる。工夫を期待したい。	A
			3 学校評価アンケートのホームページに係る項において、調査結果の肯定的な回答は60%以上であり、各説明会の参加者は5パーセント以上増加した。				
			2 学校評価アンケートのホームページに係る項において、調査結果の肯定的な回答は40%以上であり、各説明会の参加者はほぼ増減なしであった。				
			1 学校評価アンケートのホームページに係る項において、調査結果の肯定的な回答は40%未満であり、各説明会の参加者は減少した。				
大学・地域連携課	大学等ゼミ訪問の円滑な運営	校内外担当者で連携し、円滑な運営を図ることにより、生徒の研究活動を充実させ、論理的思考力、表現力を身につけさせる。	4 総合的な学習（探究）の時間「海峡学」で、充実した研究・学習ができたと感じた5回生が90%以上だった。	3	○「はい」が57%、「どちらかといえばはい」が31%であり、8割の生徒が「海峡学」で充実した研究・学習ができたと感じている。昨年に引き続き、コロナ禍での実施であったが、オンラインでのゼミ訪問もスムーズに実施でき、秋口には実際にゼミを訪問するグループもあった。昨年度の課題であったゼミ訪問の終了時期も10月までに収まった。指導する教員も例年変わっていったため、引継ぎをしっかりとすることが重要である。	海峡学という名称が良いかどうかも含めて、そろそろ見直しをしても良いのではないかと感じる。総合的な学習の重要性は、今後さらに増すこともあり、大学入試も、おそらくより総合的な見地から学生を選抜するようになると思われる。	A
			3 総合的な学習（探究）の時間「海峡学」で、充実した研究・学習ができたと感じた5回生が70%以上だった。				
			2 総合的な学習（探究）の時間「海峡学」で、充実した研究・学習ができたと感じた5回生が50%以上だった。				
			1 総合的な学習（探究）の時間「海峡学」で、充実した研究・学習ができたと感じた5回生が50%未満だった。				

分掌	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価		
1 回生	学習指導	授業前の2分前着席・黙想・朝読書（朝学）などの学習環境すべてが身についたと感じた生徒が80%以上であった。	4	2分前着席・黙想・朝読書（朝学）が身についたと感じた生徒が70%以上であった。	4	○「はい」と「どちらかといえばはい」と回答した生徒が89%であった。おおむねの生徒が2分前着席・黙想・朝読書の習慣が身につけてきていると感じる。また、2分前着席や黙想を行うことにより、気持ちを切り替えて学習に取り組むことができた。	学習への切り替えの習慣はとても良い取り組みと思う。高学年になっても、この学習が続けばよいと考える。	A	
			3	2分前着席・黙想・朝読書（朝学）が身についたと感じた生徒が50%以上であった。					
			2	2分前着席・黙想・朝読書（朝学）が身についたと感じた生徒が50%未満であった。					
			1	2分前着席・黙想・朝読書（朝学）が身についたと感じた生徒が50%未満であった。					
	生活指導	一人ひとりが活躍できる場の設定による豊かな人間性と望ましい集団の育成	行事、委員会活動等を生徒に企画・運営させることにより、自己有用感を育て、望ましい集団の育成を図る。	4	生徒の80%以上が自己有用感を感じた。	4	○新型コロナウイルス感染拡大防止という観点から、学年集会がなかなか実施できなかった。しかし、委員会活動や係活動は、生徒主体に進めることできた。本校に入学してよかったと感じている生徒が「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が98%であり、おおむね落ち着いた学校生活を送っていると感じる。	1回生では、このような回答が多いことは評価できる。生徒の主体的な活動は、自ら学び、理解することを促すことにもなると期待される。	A
				3	生徒の50%以上が自己有用感を感じた。				
				2	生徒の30%以上が自己有用感を感じた。				
				1	生徒のほとんどが自己有用感を感じることができなかった。				
2 回生	学習指導	各教科・海峡学などの学習指通して等して基礎的な学力と表現力を育成する。家庭学習の習慣化を図る。	4	学習規律、学習習慣が身についたと感じた生徒が80%以上であった。	4	○ほとんどの生徒が授業に対し、前向きに取り組んでいると回答。授業規律も身につけてきているように感じる。家庭学習に関しては調査の時には時間確保ができていたが、日頃から家庭学習の習慣を身につけさせたい。	調査前だけに限定されることのない学習時間確保は、きわめて難しい課題と思う。自発的に学習する習慣をつけさせる取り組みが重要と考える。	A	
			3	学習規律、学習習慣が身についたと感じた生徒が50%以上であった。					
			2	学習規律、学習習慣が身についたと感じた生徒が30%以上であった。					
			1	学習規律、学習習慣が身についたと感じた生徒がほとんどいない。					
	生活指導	望ましい生活習慣、自己管理能力の育成	学級活動、生徒会活動、行事を通じて豊かな人間性と主体性を育成する。デイリーライブを活用し、自己管理能力を育成する。	4	望ましい生活習慣が身についたと感じた生徒が80%以上であった。	4	○中学生らしい生活習慣が身についたと感じる生徒がほとんどであった。限られた行事の中ではあるが、主体的に取り組むことができたと感じる生徒が多かった。海峡学で、充実した地域学習や進路学習を行うことができた。	望ましい生活習慣を持続させるための工夫や見える化も必要と思う。特に本人だけでなく、周囲からみても良い生活習慣となっているかの確認が必要かもしれない。	A
				3	望ましい生活習慣が身についたと感じた生徒が50%以上であった。				
				2	望ましい生活習慣が身についたと感じた生徒が30%以上であった。				
				1	望ましい生活習慣が身についたと感じた生徒がほとんどいない。				
3 回生	学習指導	家庭での予習、学校での朝学、教科指導、復習のサイクルの定着を通して、基本的な学習習慣の確立を図る。	4	学習サイクルが身についたと感じた生徒が80%以上であった。	3	○「はい」と「どちらかといえばはい」と回答した生徒が76%であった。2回生12月より「新研究」をスタートしたが、前日に予習をし、新研究ノートをチューターに提出し、その学習内容の定着度を朝学プリントで確認するという流れが定着した。総じて学習環境は整い、学校生活は落ち着いた。	次年度の4回生への切り替え準備の重要な学年と思う。ここで学習習慣が確立されることが、4回生以降の学びに大きな差が出ると思うので、この指標を高める工夫が必要と考える。	A	
			3	学習サイクルが身についたと感じた生徒が50%以上であった。					
			2	学習サイクルが身についたと感じた生徒が30%以上であった。					
			1	学習サイクルが身についたと感じた生徒がほとんどいない。					
	生活指導	豊かな人間性を育み、主体的に動くことのできる態度の育成	学年集会、行事、委員会活動等を生徒に企画・運営させることにより、自己有用感を育て、望ましい集団の育成を図る。	4	生徒の80%以上が自己有用感を感じた。	4	○新型コロナウイルス感染症予防対策のため、様々な活動が中止、変更を余儀なくされた。しかし、大学調べや「私の意見発表」の学年発表会、地域探究活動における企業訪問や発表会の準備などをとおして、自分のあり方や生き方を考えることができた。また、教務課や進路指導課との連携をとり、自分の進路について深く考えさせることができた。限られた状況の中で多くの生徒が達成感を感じ自己有用感を育てることにつながった。	生徒の主体的な活動は、自ら学び、理解することを促すことにもなると期待される。コロナ禍にあり、十分な活動ができず、限られた活動の中でも生徒の主体性や自己有用感を育てることができたのは良かった。	A
				3	生徒の50%以上が自己有用感を感じた。				
				2	生徒の30%以上が自己有用感を感じた。				
				1	生徒のほとんどが自己有用感を感じることができなかった。				
4 回生	学習指導	後期生として十分な家庭学習の時間を確保させる。	4	昨年度より家庭学習の時間が増加した者が90%以上であった。	2	昨年度より家庭学習の時間が増加した生徒は74%であった。スマートフォンやゲームに費やす時間が自分でコントロールできない生徒がいるように感じる。	中高一貫であることの悩みがここにはあると思う。後期生としての気持ちの切り替えをどのように行うかが課題であろう。良い意味での連続性を築くことが必要と思われる。	B	
			3	昨年度より家庭学習の時間が増加した者が80%以上であった。					
			2	昨年度より家庭学習の時間が増加した者が70%以上であった。					
			1	昨年度より家庭学習の時間が増加した者が70%未満であった。					
	生活指導	基本的な生活習慣の確立	生活リズムの安定を図り、安易な欠席・遅刻をしないように指導する。	4	昨年度より欠席・遅刻の延べ人数が20%以上減少した。	4	昨年度より欠席遅刻の延べ人数は24.5%減少した。出席率は97.6%（昨年度96.6%）で改善しているが、遅刻は少し増えているので、来年度改善できるように指導したい。	遅刻が増える要因について、少し詳しく分析する必要があると思われる。生活リズムの問題なのか、通学手段に何か大きな変化が起きていないか、など生徒目線での分析も必要と思われる。	B
				3	昨年度より欠席・遅刻の延べ人数が10%以上減少した。				
				2	欠席・遅刻の延べ人数が昨年度と同程度であった。				
				1	欠席・遅刻の延べ人数が昨年度より増加した。				
5 回生	学習指導	課題や定期考査・模試、学力向上係の取り組み等を通して、主体的に学習する習慣を身に付ける。	4	4回生時の学習時間が5回生になって1時間以上増えている生徒が80%以上であった。	2	4回生時より+1時間の学習ができた（まあできた）と回答したのは68%と7割を切った。また、生徒間の学習時間の格差があるのも事実である。ただ、生徒中心の学力向上委員会を中心に、生徒全体の学習に対する意識は高まりつつあるので、今後期待したい。	学習内容のチェックが重要と思われる。自己申告で学習内容の振り返りをしてもらうことも重要である。	B	
			3	4回生時の学習時間が5回生になって1時間以上増えている生徒が70%以上であった。					
			2	4回生時の学習時間が5回生になって1時間以上増えている生徒が60%以上であった。					
			1	4回生時の学習時間が5回生になって1時間以上増えている生徒が60%未満であった。					
	生活指導	望ましい生活習慣の確立	進路実現に向け、スマホなどの端末使用時間を管理させる。	4	学習以外の端末の利用が平日90分未満の生徒が80%以上であった。	1	端末使用90分未満に関しては、達成率49%と半数にも満たなかった。学習に対する意識は高まりつつあるものの、学習に費やす時間をどう捻出するか今後の課題である。不必要な端末利用やSNSを避けるよう、今後も繰り返し呼び掛けたい。	この問題は難しいことがあると思う。家庭における接続環境に気を遣っているのに、学校の端末がそうならない、という指摘がアンケートにもあったと思う。おそらく保護者の意識も人によっても異なると思われる。	B
				3	学習以外の端末の利用が平日90分未満の生徒が70%以上であった。				
				2	学習以外の端末の利用が平日90分未満の生徒が60%以上であった。				
				1	学習以外の端末の利用が平日90分未満の生徒が60%未満であった。				
6 回生	学習指導	課外・朝学などに主体的に取り組む	4	7月三者懇談時の志望進路の決定率80%以上	3	学校での学びの機会を上手く利用すること等で視野を広げ、志望進路の方向性を7月までには定めることができた。回答した生徒は79%であった。ある程度早い段階での進路設定はできていたものと考えられる。	進路決定ができていることは重要と思う。今後とも取り組みを続けられればと考える。	A	
			3	7月三者懇談時の志望進路の決定率70%以上					
			2	7月三者懇談時の志望進路の決定率60%以上					
			1	7月三者懇談時の志望進路の決定率50%以上					
	生活指導	最上級生としての自覚向上による自己管理の徹底	各自がデザインしたPDCAサイクルと健康管理システム活用による自己モニタリングの徹底	4	学年全体の年間出席率96%以上の実現	4	最上級生として、各自がデザインしたPDCAサイクルと健康管理システム活用による自己モニタリングをしっかりと行うことができた。回答した生徒が75%であった。また、年間出席率は97.25%（14529/14940）で、96%以上が実現できていることから、最上級生としての自覚向上による効果が自己管理につながったと考えられる。	各自が取り組む仕組みは、とても良いと思う。今後の人生でも自己管理は重要と考える。PDCAサイクルの意識づけが他の学年にも必要では。	A
				3	学年全体の年間出席率94%～96%未満の実現				
				2	学年全体の年間出席率92%～94%未満の実現				
				1	学年全体の年間出席率90%～92%未満の実現				

5 学校評価総括(取組の成果と課題)

(1) 確かな学力の保証

→ 模擬試験の結果分析等を通じて、学年・教科ごとの強みや弱みを把握することができた。また、授業評価アンケートの回答結果に基づく授業改善を通じて、生徒にとってわかりやすい授業づくりに学校全体で取り組むことができた。ICTの活用により、授業や学習のスタイルにも変革が進みつつあり、今後はICTの活用をいかに学力の充実・向上につなげることができるかが課題になると思われる。

○新大学入試制度に対応した指導の研究を深め実践を進める。

- ・新学習指導要領および令和7年度以降の共通テストに対応した教育課程について検討を重ねた。文系・理系の履修科目の見直しを行うとともに、新たな学校設定科目を設置するなど、時代に即応した教育課程を編成することができた。今後は、教科「情報」に関わる指導体制の充実について、さらに検討していく必要がある。

○生徒の主体的な学習習慣の確立を図る。

- ・「主体的に学習に取り組む態度」の育成を重点目標として掲げ、様々な取組を行った。学習のPDCAサイクルを定着させるため、スケジュール帳を活用し、各自の学習の予定や履歴を記入させ、チューターなどから適宜フィードバックを行った。また、生徒が主体となって学力向上策を考え、学年全体で実行し、成果を分析・共有する取組も行い、一定の成果を収めた。

○世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実を図る。

- ・本校の特色ある英語関連行事（海外語学研修や英語セミナー等）は、新型コロナウイルスの感染拡大により実施することができなかったが、ALTとのティーム・ティーチングに力を入れ、英語の発信力向上に努めた。
- ・多様な評価方法の導入を目的として、パフォーマンステストを全学年・全英語科目で実施することを目標としたが、一部科目での実施ができなかった。CAN-DOリストとの関連を図りながら、年間指導計画を綿密に立て、計画的に実行していく必要がある。

○ICT活用を通じて、より主体的・対話的な学びを促し、自己の考えの再構成・再構築を図り、深い学びにつなげる。

- ・一人一台端末の活用が進み、学校生活のあらゆる場面で生徒がICTを効果的に利用している様子がみられた。
- ・ICTの活用に関する教職員研修を年に複数回実施し、ICTを「いつでも、どこでも、だれでも」ICTを使いこなすことができる状況の実現にむけて全校体制で取り組むことができた。
- ・Society5.0といわれる時代の中で、個別最適な学び、協働的な学びをいかに実現していくかについて今後さらに検討を重ねる必要があると思われる。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

→ 一人ひとりに対応した適切な指導により、就職希望者3名は公務員2名を含め希望実現、進学希望者86名は71人が希望を実現した。

○生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学等ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。

- ・例年実施している、1回生の下関市立大学訪問と3回生の山口大学本学訪問は、新型コロナウイルスの感染拡大により未実施に終わった。2回生は訪問先を下関市立大学に変更して訪問し、大学の雰囲気を感じる事ができた。3、4回生は地元企業を活用した企業探究活動を通して、企業と地域社会とのつながりを学んだ。3～5回生では大学講師による「出前講義」を実施し、生徒は大学での学びを体験し、進路意識のさらなる向上を図ることができた。

○本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践していく。

- ・小論文対策や面接対策に組織的に取り組み、教職員の負担も増やさず、成果をあげた。
- ・各教科で大学入学共通テストを分析し、その傾向や対策について論議を深め、授業での実践につなげた。

(3) 豊かな心をもち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

→ 各分掌・学年で人間教育に取り組み、着実に成果をあげている。

○生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。

- ・本校のリトル・ティーチャー制の実施については、生徒・教職員ともに8割が肯定的に捉えている。本年度も各種の学校行事において、生徒の企画・運営・指導力を発揮させ、生徒の自主活動を推進させることができた。
- ・寮生もリトル・ティーチャー制の実施については8割が肯定的である。寮生活においても各種専門委員会などの自治組織による活発な活動により自立心が育ち、円滑な生活を送ることができた。

○人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。

- ・新型コロナウイルスの感染拡大により、他国からの本校訪問は無かったが、オンラインで韓国の鎮海女子高校との交流を行った。また、駐日欧州連合代表部主催の「EUがあなたの学校にやってくる」を開催し、ベルギー王国大使の講演等をおこなった。

○留学制度について啓発活動の充実を図り、生徒の参加を促進する。

- ・新型コロナウイルスの感染は続いているが、今年度は「トビタテ！留学JAPAN」へ9名応募し、5名が採用された。現在、渡航制限により待機中である。

(4) 組織としての課題解決力の確立

→ 全教員がリスクマネジメント意識を持てるように今後とも計画的に研修に取り組んでいく。

○教科研修会と互見授業等の計画的な実施により、教員全体の教科指導力を一層高める。

- ・各教科で定期的・計画的に研修会を開催し、教科指導力向上に励んだ。
- ・ICT教育の充実を図るため、研究授業、互見授業等を実施するなど、教員全体で研修に取り組んだ。

○生徒指導、道徳・人権教育、教育相談等の計画的な研修により、いじめや問題行動等への対応を含む教員の指導力の一層の向上を図る。

- ・計画的に研修を実施した。引き続き教員の指導力の一層の向上を図っていく。

○新入学生への着実な学校生活への適応の為、教員全体で学習面・生活面におけるフォローを進める。

- ・職員会議等での生徒情報交換により、教員間の情報共有を図った。
- ・教育学部を志す後期課程の生徒を中心に、1回生に学習の支援を行う「Chuto Peer Support Learning」に取り組んだ。
- ・寮生の交流を深めるレクリエーション、誕生日会など、交流の機会を作った。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

→ 選抜説明会への参加児童数は昨年とほぼ同様であったが、志願倍率が1.3倍と昨年の1.7倍から下がった。下降原因の究明とその対策が必要である。

○本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、地域や保護者への広報活動の充実を図る。

- ・「飛翔プロジェクト」の推進にあたり、新型コロナウイルスの影響で地域・保護者への広報活動が十分に行われなかった。本校ホームページの充実を図り、本校の活動内容の周知を図っていく。

○小学校とその保護者を対象とした広報コンテンツの充実を図る。

- ・新型コロナウイルスの感染は続くが、8月に「おいのやまサイエンスセミナー」、11月に「入学者選抜説明会」を実施した。今後も情報発信を引き続き実施し、強い目的意識を持った児童の志願を集めたい。

6 次年度への改善策

来年度も、飛翔プロジェクトを円滑に運営することで、地域や大学との連携を一層深めながら「未来社会を生き抜く総合的な人間力」と「高い学力」を培い、世界に飛躍する人材の育成に向けて教育活動の充実に努める。

(1) 確かな学力の保証

- 教師の授業力向上に向けて、公開授業にもとづく教員研修を充実させる。
- 生徒による学力向上委員会の活動展開など、生徒の主体的な学習習慣の確立に向けた全校的な取り組みを推進する。
- 世界に飛躍する人材の育成に向けて、英語教育の改善・充実を基軸とした取り組みを推進する。
- 学習支援サービスを積極的に活用し、ICTを活用した個別最適な学習、対話的な学習の充実に努める。

(2) 生徒一人ひとりの希望進路の実現

- 生徒が明確な将来像を描けるよう、大学や地元企業と連携した大学ゼミ訪問や企業研究等を円滑に実施する。
- 本校で構築した新たな大学入学者選抜制度への対応を着実に実践するとともに、時宜を得た大学入試情報の提供を図る。

(3) 豊かな心をもち、グローバル社会を生き抜いていく力を身に付けた生徒の育成

- 生徒会、学校行事、寮におけるリトル・ティーチャー制により、生徒のリーダーシップを育成する。
- 人間関係づくりや国際交流の活動等を通して、コミュニケーション能力を高め、他者を尊重し協働して問題を解決していく力を育む。
- リモートでの国際交流や、留学生や国際活動を行っている方から学ぶ機会を創出するなど、コロナ禍での国際教育の充実に努める。

(4) 組織としての課題解決力の確立

- 新学習指導要領の確実な実施を踏まえた研修を計画的に実施する。とくに主体的な学習者の育成に向けた取組を組織的に展開し、教育効果の分析について研究を行う。
- 全教員がICT活用とこれまで蓄積してきた実践とのベストミックスにもとづいた授業を推進し、その成果を共有する機会を定期的に設定する。
- 生徒、保護者との信頼関係にもとづいた指導を一層行き届かせるため、1人ひとりを大切に生徒指導の充実に努める。アンケート等による定期的な状況把握を行う。
- 新入生が学校生活に適應していくための取組を、学年間・分掌間で調整のもと企画し、リトルティーチャー制の取組を活用しながら計画的に進める。

(5) 生徒募集活動の強化による志願者数の増加

- 本校の教育活動を整理した「飛翔プロジェクト」を推進し、その内容を広報するため、小学校や学習塾等で学校説明会を開催する。
- 小学生とその保護者が、本校の様子を知る機会を充実させるため、学校ホームページをはじめとした情報発信を強化する。